

上田市文化財調査報告書

神宮寺古墳調査報告書

長野県上田市

上田市教育委員会

1974年8月

20

203

31

序にかえて

上田市教育長 山 極 真 平

神宮寺古墳は、川西地区下室賀城山の山麓に立地する古墳時代後期の円墳であります。保存状態も極めて良く、川西地区を代表する古墳であり、その学術的な究明が待たれておりましたが、已に旧川西村当時に、この古墳の清掃調査が計画され、これが上田市に引継がれ、実施時期を検討しておりましたところ、上田市文化財調査委員の小林幹男先生を調査委員に上田染谷ヶ丘高校歴史班ならびに試大学の学生諸君の協力を得て実施することができました。

これには、地元の方々にご協力を頂いたことも忘れることが出来ません。

このようにして順調に進められた中で多くの成果があがり、特に東側の壁に刻まれていた円文を発見したことは、県内でも初めての快挙でありまして、装飾的な意味あいを強く感じさせる出来事として、学術的にも論議を呼ぶことでありましょう。

また、上田市における他の古墳の研究にも重大な資料となり、郷土史の解明に大きな影響を与えることでありましょう。

私たちは文化財の保護を行政的に推進する立場として、古代文化の究明は、勿論この古墳の存在価値を市民の皆さんによく理解して頂き、郷土の貴重な文化遺産として護つていく気持を大切に育ててまいりたいと考えるものであります。また耕した土地に文化の芽を育てていくのは私たちの生命であります。文化財に対する愛情は、私たちの祖先に対する思慕であり、人間尊重の源泉を静かに汲むすべでもあります。

目 次

序にかえて	1
例 言	4
図 版	5
I 神宮寺古墳の位置と環境	11
II 発掘調査の経過	13
1. 調査の経過	13
2. 調査の構成	15
3. 調査日誌	15
III 墳丘と石室の構造	17
1. 墳丘の規模と構造	17
2. 石室の規模と構造	18
3. 側壁の文様	22
IV 出土遺物	23
1. 遺物の出土状態	23
2. 土 器	23
3. 古 銭	26
V 考 察	26
あ と が き	29

図 版 目 次

図版 1	神宮寺古墳の環境と調査前の古墳	5
図版 2	神宮寺古墳の全景と石室	6
図版 3	墳丘と周裾の葺石・玄室の内部	7
図版 4	石室の石組	8
図版 5	石室の石組と側壁の文様	9

挿 図 目 次

第 1 図	神宮寺古墳と周辺の遺跡	10
第 2 図	墳頂から南方を望む	12
第 3 図	雪に覆われた神宮寺古墳	14
第 4 図	神宮寺古墳墳丘実測図	17
第 5 図	墳丘東面の葺石	18
第 6 図	神宮寺古墳石室実測図 1	20
第 7 図	神宮寺古墳石室実測図 2	21
第 8 図	側壁の文様実測図	22
第 9 図	出土遺物実測図	24

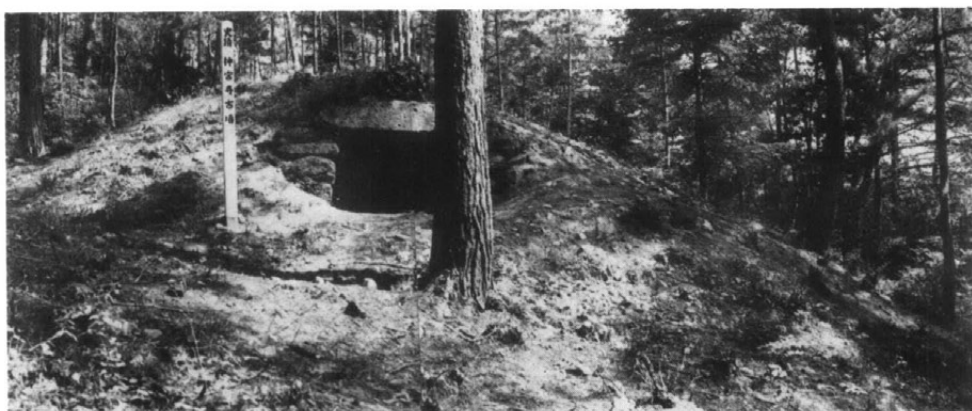
例 言

- 本書は、上田市大字小泉の岸田寛道氏が所有する上田市大字下室賀字神宮寺1640番地地籍の山林内に所有する「神宮寺古墳」の調査、および出土遺物に関する報告書である。
- この調査は、上田市教育委員会が主体となつて、上田市指定文化財候補物件の精査と一部崩壊の危険性をもつ石室の現状を把握して、保全に必要な諸資料を得るため行なつたものである。
- 調査は、上田市文化財調査委員の小林が担当し、玉川大学・日本女子大学の学生、および上田染谷丘高等学校歴史班の高校生諸君、そして、地元有志の皆さんのご協力によつて、昭和49年3月29日から同年4月3日にわたつて行なわれた。
- 墳丘の測量と石室の実測は、全員が分担して行ない、その調整と出土遺物の実測・拓本・写真の撮影は小林が担当した。
- 本報告書の執筆・編集、および本書に使用した写真・図面の調整は、小林が上田市教育委員会と連絡をとりながら、すべて担当した。
- 今回の調査は、たまたま調査着手の予定日に、春の大雪が降り、その雪解けの水が、石室内にしたたり、特に日中気温が上がると、雨の中で作業するように冷たい滴が激しく注いだ。こうした悪い条件の中で、泥にまみれ、雪解けの水にぬれながら、終始調査に献身された諸君に、心から敬意と謝意を表し、また、この調査にご協力いただいた地主の岸田寛道氏と、調査の企画・準備に周到な配慮をいただいた上田市教育委員会文化財係の諸氏に、心から感謝申し上げます。

1974年7月 小林 幹 男



図版 1 神宮寺古墳の環境と調査前の神宮寺古墳



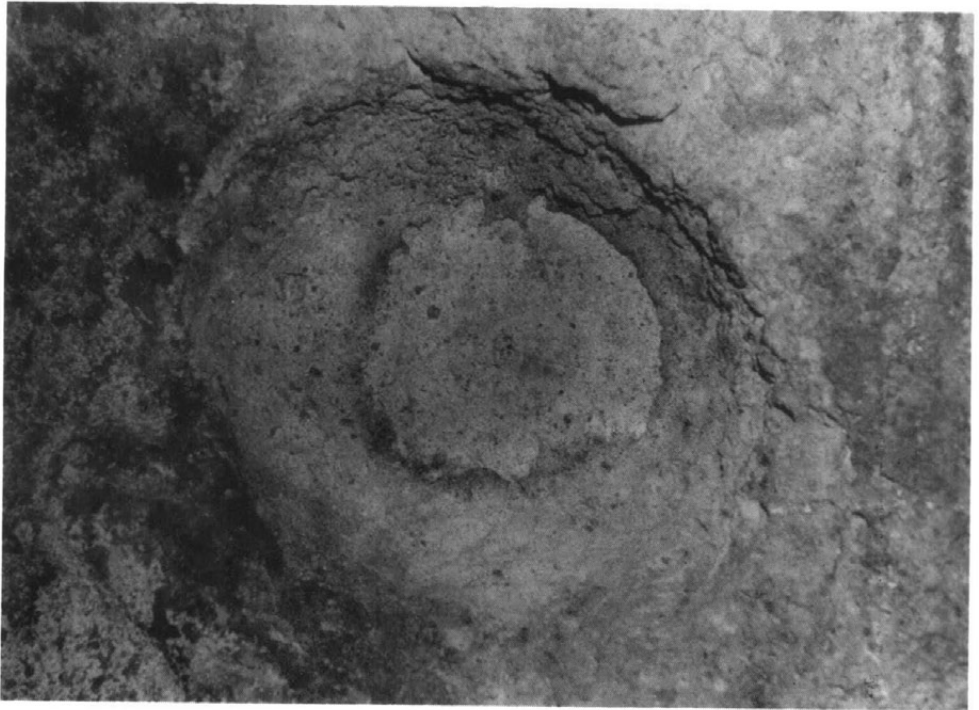
図版 2 神宮寺古墳の全景と石室（羨門部より）



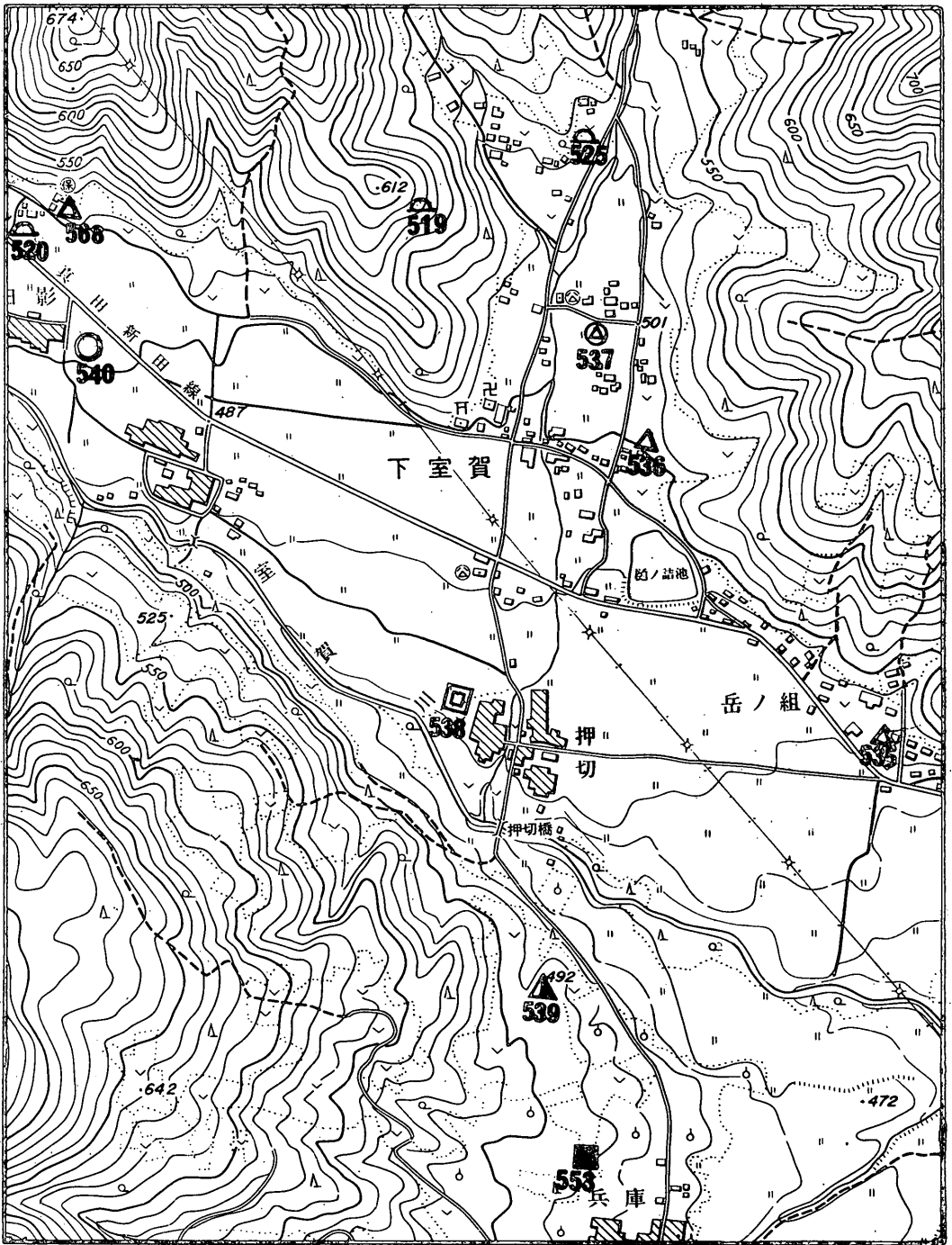
図版 3
(上) 墳丘と南麓周裾の葺石
(下) 玄室の内部



図版 4 石室の石組（羨道と玄門部）



図版 5 玄室後半部の石組と側壁の文様



第1図 神宮寺古墳と周辺の遺跡 1:10,000

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 519 神宮寺古墳 | 520 長谷塚古墳 | 525 上之平古墳 |
| 535 岳之本 | 536 樋之詰 | 537 神宮寺 |
| 538 寺前 | 539 押切前 | 540 日影 |
| 553 原 | 568 長谷塚 | |

I 神宮寺古墳の位置と環境 (第1図)

神宮寺古墳が所在する三ツ頭山地は、上田盆地の西部に連なる川西山地の北西隅にあり、浸食が進んで壮年期の地貌を呈している。そして、三ツ頭山地のほぼ中央部にそびえる三ツ頭山(923m)と、その東方に連なる城山(933m)。「里伝に小泉氏の城跡という。泉太郎公季の裔、小泉氏を称し、この地に⁽¹⁾抛る」という)の中間南麓に、神宮寺川が深く山麓を開折して、押出し扇状地を形成し、その上に神宮寺集落が発達している。神宮寺古墳は、この押出し面の西方に伸びる三ツ頭山の山腹、上田市大字下室賀字神宮寺1640番地地籍(上田市大字小泉・岸田寛道氏所有の山林)にあり(図版1・上)、周辺はおよそ20度前後の急斜面であるが、古墳の立地する標高およそ580mの地点は、狭いテラス状の台地となつている。眼下を流れる神宮寺川は、扇状地の西側を南流して、谷口のおよそ500mほど南方の押切集落南端付近で室賀川に注いでいる。この神宮寺川は、急流で浸食が激しいため、付近の崖錐面を押出して、室賀川を南西山麓に押しやり、その押出し面に、押切集落がある。

この扇状地に分布する遺跡は、まず神宮寺集落の北部地域に、縄文期の石鏃、後期の土師器などを出土する神宮寺遺跡があり、また、谷口の扇状地東部付近には、樋之詰遺跡があり、後期の土師器を出土し、押切集落の西方、室賀川北岸台地上にある寺前遺跡では、縄文期の勝坂式、および加曾利Ⅱ式、彌生期のつば、古墳時代前・中期の土師器など、広範な遺物を出土して⁽²⁾いる。(第1図)

三ツ頭山地の山麓に分布する古墳は、神宮寺古墳の他に、神宮寺集落北東方の城山西南麓にある上之平古墳と、日影集落北方の道路脇にある長谷塚古墳の2基がある。いずれも後期の円墳と推定されるが、2基ともすでに破壊され、長谷塚古墳出土と伝えられる鉄製直刀が、上田市立室賀小学校に保管されている。神宮寺古墳の立地する地点は、これらの遺跡(集落)と耕地を眼下に眺望する山腹にあり(第2図)、遙か南方を望めば、古代東山道の要衝と推考される兵庫集落や川西平野が広がり、室賀川の南岸台地上には、古墳時代後期から

歴史時代にわたる遺物を豊富に出土する押切前遺跡が望まれる。

古代東山道は、大和朝廷の東国経営の重要幹線⁽³⁾であり、特に越の蝦夷経営を推考するとき、この川西平野と分岐点の兵庫付



第2図 墳頂から南方を望む

近、および室賀谷は、まさに軍事上・交通上の要衝であり、神宮寺古墳の規模と構造が、周辺の遺跡や耕地面積に比べて、かなり不釣り合いであるとの疑問も、その辺に研究の余地があるのではあるまいか。

註1. 小泉郡役所 「小泉郡史」小泉時報局 天正11年

註2. 小林 幹男 「上田市の原始・古代文化」上田市教育委員会 昭和49年

註3. 田名網 宏 「古代の交通」日本歴史叢書24 吉川弘文館 昭和44年

Ⅱ 発掘調査の経過

1. 調査の経過

神宮寺古墳は、昭和48年4月1日に、旧川西村が上田市へ合併した際に、史蹟とされ、調査のための経費が計上されて引継がれた。これを受継いだ上田市教育委員会は、前述の経過から、昭和48年度事業として調査を企画し、まず、文化財調査委員会が市指定文化財候補物件の下見の一環として、昭和48年11月15日に現地を踏査した。この結果、神宮寺古墳は、規模・構造とも旧市内の指定物件と比較し、なんら遜色のないものであることが確認され、基本調査を年度内に行なうこととなり、小林が調査を担当することになった。その後、小林は調査の方法・範囲等、詳細な調査計画を立案するため、再度にわたつて、墳丘・石室の状態を精査した。その際、石室の玄室内玄門部寄りの東側壁の基礎石が、かなり前面に押し出し、崩壊の危険性を伴なうことが判明、本調査に石室の保全のための方途を考究する資料を得ることも含めることにした。

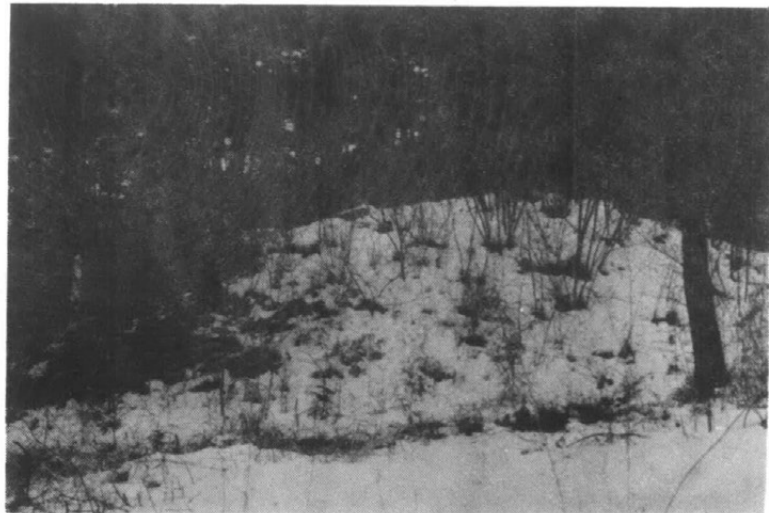
本調査は、当初の計画では、年度内に調査を終了するため、昭和49年3月初旬から、古墳の清掃・整備・実測を目的とする調査に着手する予定であつた。ところが、たまたま、東信土地改良事務所が施工していた東塩田地区の天神・山田屋敷の両地籍に、約1万㎡にわたつて遺物の包蔵地が所在し、上田市教育委員会では、工期と水田耕作の田植時期の関係から、昭和49年3月20日ごろまでには、全調査を完了する必要に迫られた。このため、事態の緊急性と農業耕作に対する配慮から、天神・山田屋敷両遺跡の緊急発掘調査を優先し、この調査の終了後に神宮寺古墳の調査を実施することになった。

こうした事情から、神宮寺古墳の調査は、昭和49年3月27日に着手することが予め決定された。ところが、この計画は、27日に突如として春の大雪に見舞われ、着手時期は更に2日延期されて、3月29日から4月3日の6日間にわたつて調査が行なわれた。(第3図)

今回の調査は、あくまでも市指定文化財候補物件としての基本調査と、石室の保全計画を樹立するための基礎資料を得る目的で行なわれたものである。従って、調査の方法は、墳丘の自然堆積土を完全に除去して、その構造を精査したり、石室の構造や石組を解体して究明するための発掘調査が実施されたものではない。このため、本書に記述した墳丘の規模を示す数値は、雑木などを伐採し、堆積した落葉を清掃した状態における測量数値であり、石室の床面も、できるだけ現状を維持するため、崩土の除去を床面敷石の上面までで打ち切り実測したもので、敷石の部分を掘割つて構造的な解明等を意図する発掘調査は実施していない。

調査は、まず墳丘上の雑木を伐採し、その作業に続いて、墳丘と周裾に堆積した落葉を除去・清掃し、墳頂を基点にして、20mのコンター・ラインによる測量を行なった。石室の調査は、羨道と玄室に崩落した土砂や礫を、順次上層から除去したが、すでに盗掘等によつて全面が破壊・攪拌されて、層序的な変化はなく、遺物もほとんど滅失して、わずかに玄室と墳丘の西側周裾から少量の土器片が、また、玄室の崩土上層から江戸期の寛永通宝が検出されたのみである。これらの調査と平行して、東側壁の破壊を防止するため、丸太を入れて補強し、応急の処置をとつたが、早急に鉄製の枠組等を用いて、崩落を防止するための保全措置を講ずる必要がある。

石室の実測は、雪解けの滴によつて、画板が水浸しになり、困難をき



第3図 雪に覆われた神宮寺古墳(3月29日)

わめた。この作業中に、奥壁際の東側壁の基礎石に、椀状に石を刻込み、日輪を描いたものと推考される文様が発見された。(図版5)

このように今回の調査は、市指定文化財候補物件の清掃・整備を目的とするものであつたが、古墳の構造の精査、円文の発見等、多くの成果を収め、無事所期の目的を達成することができた。

2. 調査の構成

- | | |
|-------------|------------------------------------|
| (1) 調査の実施主体 | 上田市教育委員会 |
| (2) 調査班の構成 | |
| 調査担当者(調査主任) | 小林幹男 上田市文化財調査委員
日本考古学協会員 |
| 調査補助員 | 古畑悦子 玉川大学文学部学生
中村明子 日本女子大学文学部学生 |
| 調査参加団体 | 長野県上田染谷丘高等学校歴史班
地元有志グループ |
| (3) 調査事務局 | 上田市教育委員会事務局 |

3. 調査日誌

3月29日(金) 晴

一昨日降つた大雪が、まだ山肌には厚く残つているが、空は紺碧に晴れあがり、汗ばむような暖さである。残雪に足を滑らせながら、墳丘上の雑木の伐採を行ない、墳頂部を残して、ほぼ作業を完了する。午後3時ごろから、前庭部の調査に着手する。出土遺物なし。

3月30日(土) 晴

墳丘上の残雪が、ようやく消えてきたので、墳頂部の雑木の伐採と併行して、墳丘の清掃調査に着手し、夕刻までに西麓の精査をほぼ完了する。石室の調査

は、玄室内の崩土の除去にかかり、およそ、全面を35cmほど掘り下げる。出土遺物は下表のとおりである。

奥壁より	320cm	10cm	墳丘西麓 の周裾
側壁より	西壁-70cm	西壁-150cm	
種類・数量	土師器33	施釉陶器1	須恵器3
備考	床面敷石上	床面敷石上	

3月31日（日）薄曇

前日の作業を継続する。墳丘の清掃は、周裾を残して終了。石室も夕刻までには、敷石面まで調査・清掃を完了する。出土遺物は下表のとおりである。

奥壁より	20cm	180cm	20cm	20cm	180cm
側壁より	西壁-80cm	東壁-20cm	東壁-100cm	東壁70cm	西壁70cm
種類・数量	施釉陶器1	施釉陶器1	施釉陶器1	土師器3	古銭3
備考	床面敷石上	床面敷石上	床面敷石上	床面敷石上	覆土中

4月1日（月）小雨後晴

本日より墳頂の測量と石室の実測に着手する。出土遺物はなし。NHK・読売・毎日・朝日・信濃毎日の各新聞社・放送局が取材に来訪。

4月2日（火）晴後薄曇

前日の測量・実測の作業を継続し、併行して周裾の清掃・確認を行なう。夕刻までに石室の一部を残して作業を終了する。出土遺物なし。

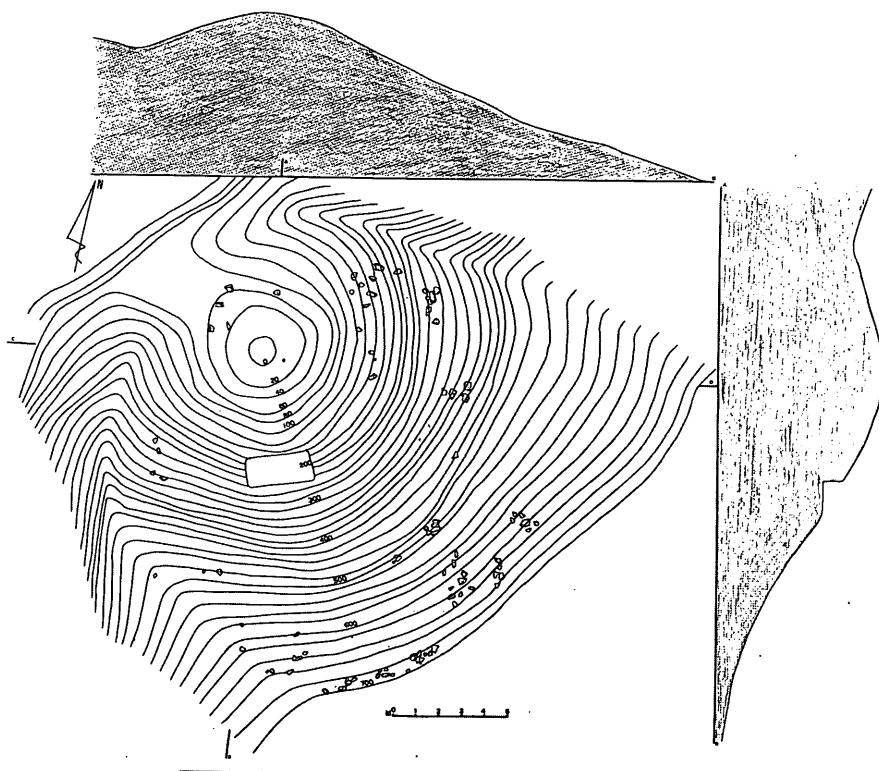
4月3日（水）晴

石室の実測未了部分と東側壁の円文の実測を行ない、夕刻までには、全作業を終了した。

Ⅲ 墳丘と石室の構造

1. 墳丘の規模と構造 (第4図)

神宮寺古墳は、勾配約 20° の山腹の一部を削ったテラス状の台地にあり、約 17° の傾斜地に、盛土によつて構築された古墳時代後期の円墳である。現状における墳丘の規模は、墳頂部で計測した東西の径が 15.7m 、東西の最大部径が 24.5m 、南北の径が 18.5m 、高さの最大が南麓で 7m 、最小が北麓の 6.0m で、形態は墳丘が南面に伸びる山腹の急斜面を利用して構築されているため、北麓に比べて南麓の周裾が、およそ $1:3.5$ の比をもつ帆立貝状を呈している。(第4図)



第4図 神宮寺古墳・墳丘実測図

墳丘の構築法は、山腹を削った土砂を石室上に盛り、葺石がコンター・ライン0.4 m、1.8 m、3 m、3.8 m、5.2 m、6.2 m、7 mに沿って、部分的に認められた。



(第5図)

このうち6.2 m

第5図 墳丘東面の葺石

と7 mのコンター・ラインに沿った葺石は、平石を列状に墳丘の周裾に配置したものと考えられる(図版3)。また、東麓の周裾のコンター・ラインがやや間延しているのは、この部分の全面に押出しがあり、変形したものである。従つて、東麓の周裾は、6.2 mのコンター・ラインの葺石の東北端から、およそ半円を描いた延長線付近と推定され、この場合、押し出しによる拡大部分は、およそ5 m前後と推考される。

前庭部は、2.4 mのコンター・ライン付近に、奥行1.35 m、幅最小(羨門部)2.75 m、最大(南端)2.95 mの台形状に開折して築かれている。墳丘の保存状態は、墳頂部と東麓周裾の盛土が流れて、わずかに変形している他は、概ね良好に遺存しており、今後も適切な保護処置をとられるよう切望する。

2. 石室の規模と構造 (第6図・7図)

神宮寺古墳の石室は、両袖型横穴式の構造をもち、中心線の各位置で計測した規模は、石室の奥行全長が7.7 m、羨道の奥行が3.25 m、玄室の奥行が4.45 mである。羨門部は緩くラツパ状に開いて南東10°に開口し、幅1.29

m、高さが1.09mで、玄門部は大きな角石を両側壁に直角に立てて楯石としている。玄門部の幅は1.42m、高さが1.33mで、玄室との境に東側壁で4.4cm、西側壁で4.8cmの袖をつくっている。玄室の規模は、奥行が東側壁際で4.46m、西側壁際で4.43m、玄門際の幅は2.35m、高さが2.14m、奥壁部の幅が2.17m、高さが2.18mである。

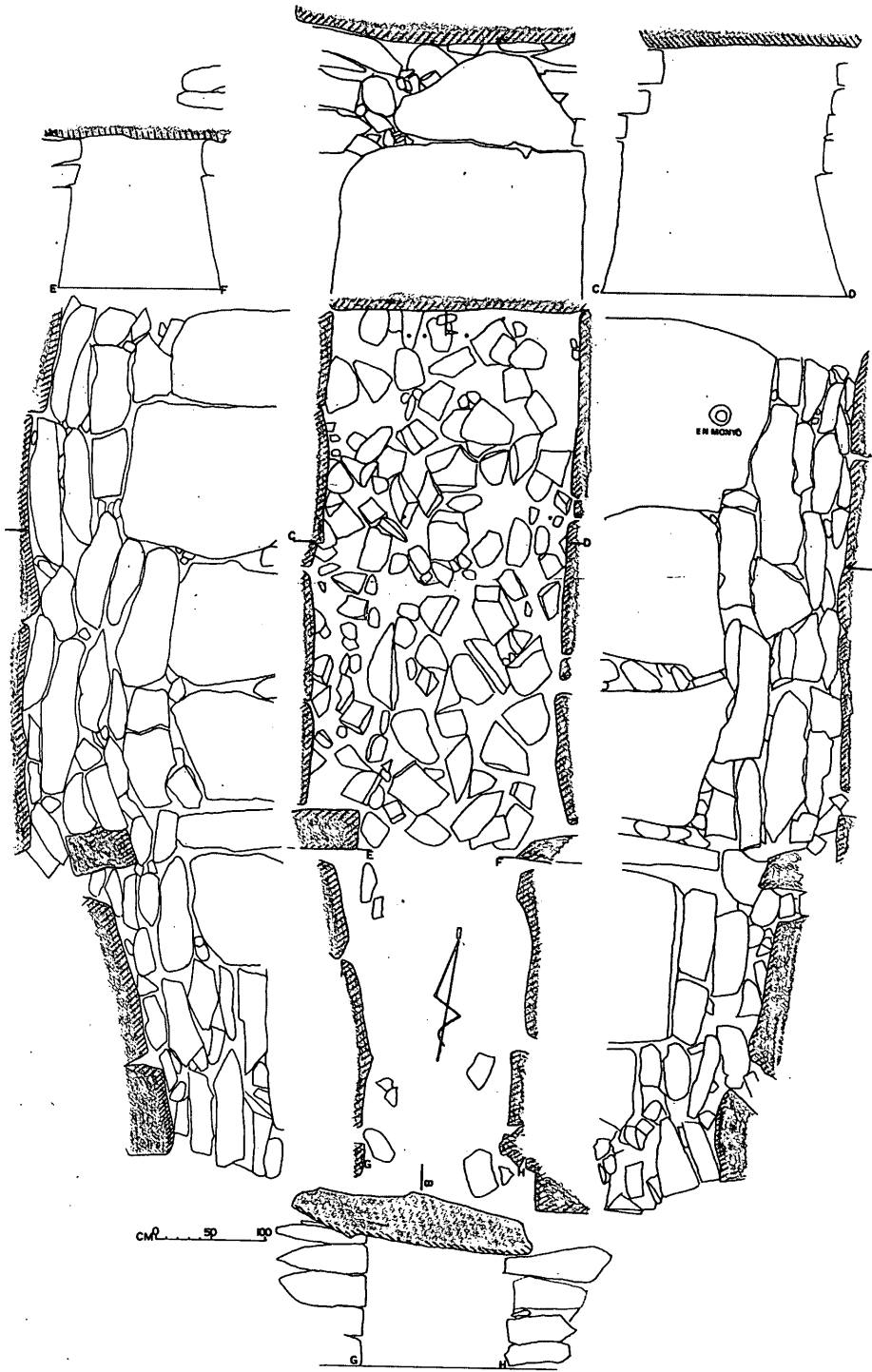
この数値を構造上の比で示せば、奥壁幅：石室の全長比が1：3.55、奥壁幅：玄室奥行の比が1：2、羨門幅：羨道の奥行比が1：2.5、玄門幅：石室の全長比がおよそ1：5.5、同玄室奥行比が1：3である。

なお、奥壁部を原点として、1mごとの間隔で計測した各位置の計測値は、次表のとおりである。

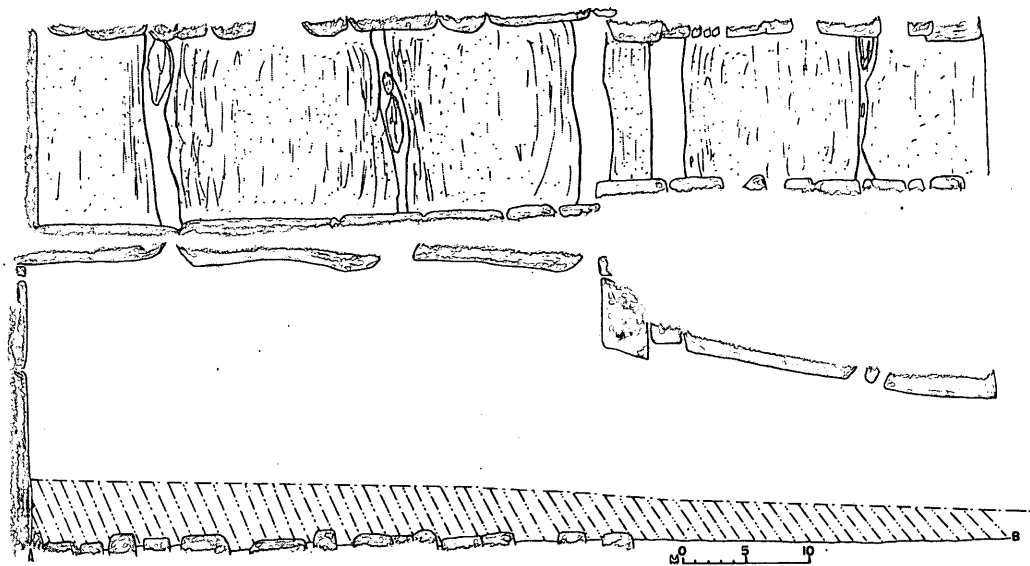
奥壁より (m)	1	2	3	4	5	6	7
幅 (cm)	220	215	222	222	164	150	130
高さ (cm)	218	218	226	228	160	130	108
石室内の位置	← 玄 室 →				← 羨 道 →		

以上の計測値でみると、玄室の形態は、やや狭長な箱形で、胴張り等はなく、基礎から天井に向つて側壁が約15°縮約しているのが特徴である。羨道部の形態は、玄門部から羨門部に向つて幅・高さともに緩く縮約して狭隘となり、羨門部で再び幅員がラツパ状に拡大して南東10°に開口している。上部の縮約は、玄室より小さいが、僅かに認められ、形態的には羨門部より内部がしだいに広くなり、また羨道部奥行に比較して玄室の奥行の大きい7世紀中ごろの特徴を示している。

石室の石積は、奥壁部が大石を上下に2枚重ねている他は、基礎のみに大石を配して側壁を築き、上部はしだいに縮約しながら面のある自然石を乱積状に小口積にしている。天井の構造は、玄室の天井に幅1.5m前後の大きな平石を3個用い、玄門部には幅5.5cm、厚さ3.5cmほどの角石をのせて楯石としている。羨道部の天井は、玄門寄りに幅1.4mほどの平石をのせ、更に羨門部には



第 6 图 神宮寺古墳石室実測図 1



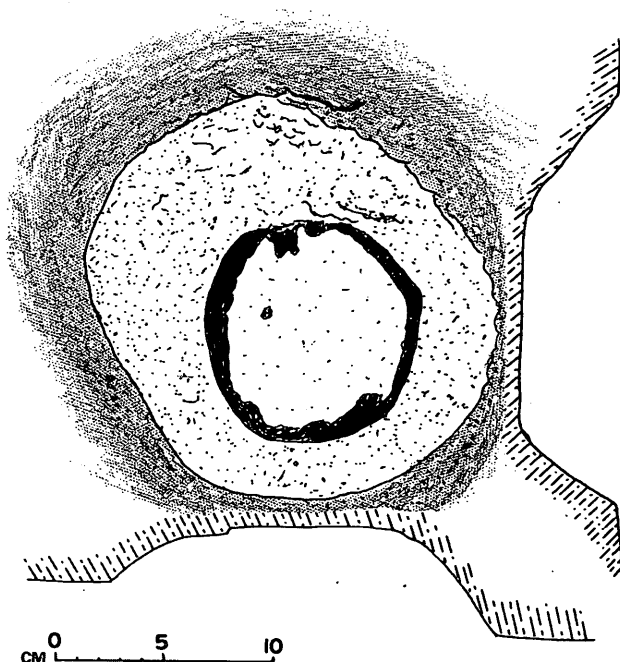
第7図 神宮寺古墳石室実測図2（天井石組と断面図）

面のとれた平石を用いて、古墳の体裁を整えている。

玄室の床面には、上面が平らな自然石をほぼ全面に敷きつめ、奥壁よりの一面と側壁玄門寄りの両側に、棺台状の配石が認められる。特に西側壁の配石は、幅約80cm・奥行250cmの範囲に割石などを置いて区画し、意図的なものともみることができる。そして、床面のレベルは、奥壁寄りの約1.5mの範囲が僅かに高く、玄門部寄りでは、ほぼ中央部が通路状になつてやや低くつくられているが、落差は極めて小さい（第7図）。羨道部の床面は、敷石がほとんど失われ、数個の平石が点在しているのみである。この面の敷石の所在は、現在の状態からは明らかではないが、敷石のない粘土の床面であつたことも考えられる。そして、羨門部付近に集中している敷石は、この場合閉塞部のものと考えてよいであろう。

3. 側壁の文様

円文が彫られている部分は、東側壁の奥壁際の基礎に用いられている巨石の中央上部である。この巨石は、幅150cm、高さ152cmの台状を呈する自然石で、円文の中心点は、その上端より41cm、左端より76cm、右端より85cm、床面から105cmの位置にある。円文は粗い安山岩の肌を削り、径18.2cm（縦径）と18.7cm（横径）のややゆがんだ外円の中に、深さ約8cmほどの椀状の円を彫りくぼめて、径9cm（縦径）と9.7cm（横径）の内円を円心円状に描き、内円の周辺に3～10mmの黒色の縁がつけられている。この円文は、まだらに変色した岩肌に白く日輪のように彫られており、極めて単純な構図であるが、呪術的意味をもつ装飾の一つと考えられよう。



第8図 側壁の文様実測図

Ⅵ 出 土 遺 物

1. 遺物の出土状態

この古墳に副葬された遺物は、盗掘によつてほぼ完全に失われてしまつた。今回の調査によつて、検出された遺物は、玄室内に崩落した覆土の上層から寛永通宝 2 枚、年代不詳の古銭 1 枚、玄室の床面敷石直上の奥壁付近と東壁際中央から施釉陶器片計 4 点（うち奥壁寄り出土した 3 点は 1 個体のものであつた）、奥壁際と西壁玄門部寄りから土師器片計 3 6 点、墳丘西麓周裾から須恵器片 3 点などであつた。各遺物の出土地点を整理すると、下表のとおりである。

種類	施 釉 陶 器				土 師 器		古 銭
位 置	10-W150	20-W80	180-E20	20-E100	320-W77	20-E70	180-W70
数 量	1 片	1 片	1 片	1 片	33 片	3 片	3 枚
備 考	高台付壙形陶器片				坏形土器片		寛永通宝 2

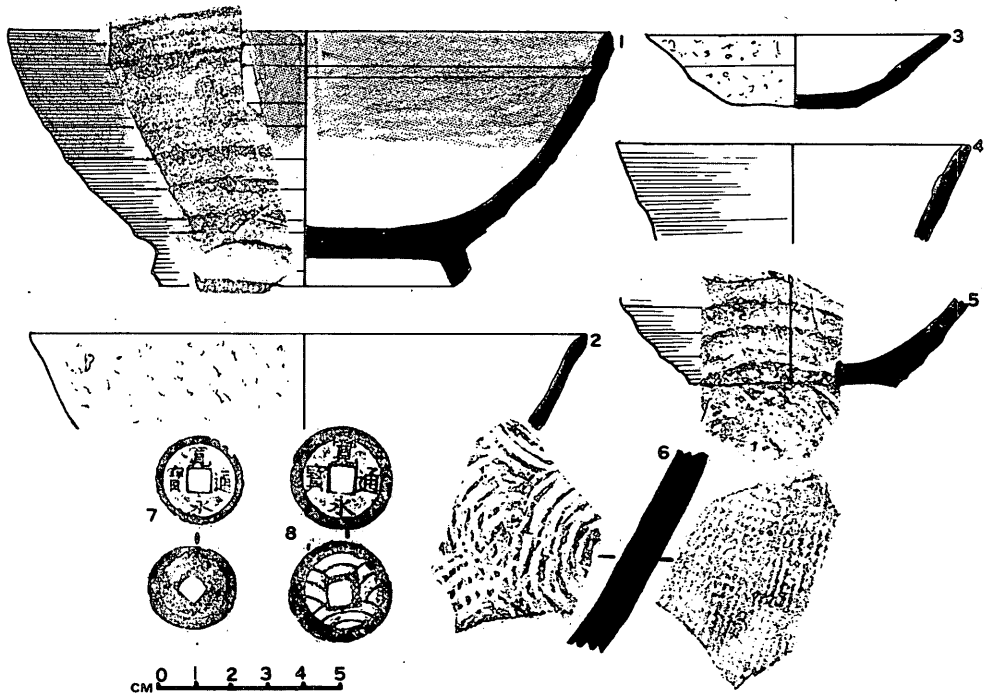
位置 奥壁より m — 東壁より (E)・西壁より W m で示す。

2. 土 器 (第 9 図)

今回の調査によつて検出された土器は、土師器・須恵器・施釉陶器の 3 種類である。ほとんどの遺物が小破片のため、器形の判然としないものが多い。以下器形の推考できるものを軸にして、施釉陶器・土師器・須恵器の順に略述したい。

(1) 施釉陶器 (第 9 図 1)

出土遺物の中に、この種の遺物が含まれていたことは、神宮寺古墳の埋葬時期の下限、すなわち、追葬の行なわれた時期を知る上に、たいへん重要である。検出された遺物は、奥壁際から 1 個体に接合される破片 3 点、東側壁の中央部



第9図 出土遺物実測図

から口辺部の小破片1点など計4片である。しかし、出土地点の異なる後者の破片も、胎土・焼成ともに前者と同質で、恐らく同一個体のものが散在したと考えて大過あるまい。そして、出土した位置は、いずれも床面敷石の直上であり、この古墳の追葬期の下限を示すものと考えてよからう。

検出された遺物の器形は、高台付碗形陶器に分類されるものである。器面は淡茶褐色の胎土の上に、薄く淡緑色の釉が施され、胎土・成形・焼成ともに極めて良質である。器形の口縁がわずかに内弯し、口径16.3cm、碗部の高さ6.1cm、同底部径8.4cm、器台の高さ8mm、全体の器高7.9cmである。また、胴部は緩く内弯気味にカーブし、器面にはロクロ痕が残り、擦痕が廻つて口縁部から胴部に5段のウェーブを帯状につくっている。器台部は、別途に成形した輪を碗部の底に接着しているが、底部で広がる断面台形を呈し、下胴との間に深い「く」の字形を描いている。器形の各部の計測比は、碗部の高さ：口径

の比が1:2.7、同高さ:底部径の比が1:1.3、底部径:口径の比が1:1.1、器台底部径:口径の比が1:2である。胎土は淡い灰茶褐色を呈し、美濃須衛窯のものに類似し、折戸第53号窯期⁽¹⁾の11世紀末ごろのものと考えられる。

(2) 土師器 (第9図2~5)

検出された土師器片は、合計36点である。そのうち器形がおよそ復元できるのは、4個体であり、他の破片もほとんどこの4個体に接合されるものと思われる。この土師器は、いずれも坏形土器の破片で、器形・成形上の手法に若干の相異が認められ、形態的に4類型に分けられる。

第9図の2(以下2のように略す)は口径が15.2cmの坏形土器片で、器面は淡茶褐色を呈し、薄手であるが胎土に砂礫がまじり、成形も雑である。口縁は唇状の弱い外反りで、肩の張りも弱く、下胴と底部は失われているが、胴部で緩く内弯のカーブを描いている。

3は口径が8.3cm、高さが1.9cm、底部径が3.4cmの皿状を呈する小型の坏形土器片である。口縁部は弱い外反りの嘴状口縁で、頸部が「く」の字にカーブして肩が張り、下胴で緩いカーブを描いて上げ底気味の平底に続いている。器面は淡赤褐色を呈し、ロクロ状の擦痕がわずかに残り、底部はヘラ削りによつてついている。器形の各部の比は、高さ:口径の比が1:4.4、高さ:底部径の比が1:1.8、底部径:口径の比が1:2.4である。

4は口径が9.4cmの碗形に近い小型の坏形土器片で、底部は失われている。口縁は唇状を呈し、わずかに外反りし、器面は淡赤褐色を呈してロクラ痕が残つている。

5は口辺部を欠く坏形土器片で、器面が茶褐色を呈し、ロクロ状の擦痕がよく残つている。底部は平底で糸切り痕が薄く残り、径5.6cm、胴部には三角波状に凸帯が数本廻らされている。

これらの土師器は、「信濃史料」第1巻所載の第5様式、すなわち国分期に

註2

比定されるものと考えてよからう。

(3) 須 惠 器 (第9図-6)

墳丘の西麓周裾より検出された小破片3点で、器形は判然としないが、いずれも大型の甕形土器の破片と思われる。器面は暗い青褐色を呈し、粗い布目状のタタキ目がつけられ、内面にもタタキ目の青海波文が認められる。胎土は良質で、厚さが9mm、下胴の部分と推定されるが、緩いカーブを描いている。

3. 古 銭 (第9図7・8)

3枚の古銭は、いずれも崩落した土砂の上層から検出されたもので、古墳の副葬品とは直接関係がない。1枚は腐蝕して年代は明らかでないが、他の2枚は銅1文銭(7)と銅4文銭の寛永通宝である。

註1 檜 崎 彰 一 「盗器の道」⁽¹⁾名古屋大学文学部二十周年記念論集

(1968)

註2 信濃史料刊行会 「信濃史料」第1巻下 (1956)

V 考 察

神宮寺古墳は、三ツ頭山の東南麓山腹の傾斜地を利用して築造したBクラスの古墳時代後期の円墳である。立地条件と墳丘の形態が神宮寺古墳と類似するのは、舟窪第1号墳⁽¹⁾～第5号墳、半過第6号墳、日向小泉第6号墳、浦野塚古墳、口明塚古墳など、現存するものだけでもかなりの数におよぶが、いずれもBないしはCクラスの古墳時代後期、あるいは終末期の円墳である。そして、これらの石室は、いずれも横穴式であるが、石室の形態に2類型を認めることができる。すなわち、神宮寺古墳の周辺や千曲川に面した西山地籍・半過地籍

などに分布する浦野塚古墳・舟窪古墳群の古墳、半過古墳群の古墳などは、いずれも神宮寺古墳と同様な両袖型横穴式の構造をもっている。これに対して、川西丘陵を隔てて、神宮寺古墳と比較的近い距離にある塩田平の古墳は、いずれも袖なし型横穴式の構造をもっている。すなわち、直線距離で東南方約7km⁽²⁾の距離にある他田塚古墳は、奥壁の幅：石室の奥行全長の比が1：6の構造をもつ狭長な袖なし型横穴式石室であり、南方約6.5km⁽³⁾にある皇子塚古墳は、同比が、1：3の構造をもつ短軀な袖なし型横穴式の石室である。石室の構造比では、後者より神宮寺古墳の1：3・55の方がやや狭長な形態を示している。従つて、両袖型と袖なし型、あるいは片袖型といつた横穴式石室の形態の差異は、上小地方に関する限り編年的な差異とみることは危険であろう。上記の資料によつて判断する限り、政治的・文化的な背景をもつ地域性による差異と考えたい。

さて、神宮寺古墳は、石室の基礎に面のある巨石を用い、上部を乱積状の小口積にして約15°縮約して築造し、奥壁では巨石を2段に重ねて天井まで積み上げている。側壁の石積の手法では、昭和47年に調査された他田塚古墳の例に類似しているが、他田塚古墳は、奥壁の上部を側壁と同じ手法で小口積にしているのに対し、神宮寺古墳の場合は、前述のとおり2個の巨石を重ねて、全体を埋めている。これらの石積法では、7世紀はじめごろと推定される他田塚古墳と同様に、やや古い手法を残していると考えてよいであろう。

しかし、石室の形態をみると、神宮寺古墳の石室は、奥行が縮約して、奥壁幅：奥行全長の比が、他田塚古墳の1：6に対し、1：3・55とやや短軀な箱形になつている。この数値は、形態・構造が酷似している蛇川原古墳の1：4：55より短軀で、袖なし型の皇子塚古墳の1：3より狭長型とみることができる。構造、および形態の特徴を総合してみると、神宮寺古墳の築造年代は、他田塚古墳・蛇川原古墳よりやや新しい7世紀中ごろと推考される。

また、検出された施釉陶器は、檜崎彰一氏の高台付椀形陶器の編年⁽⁵⁾からみて、0-53期に比定されるもので、土師器の編年もほぼ同期に比定される。従つ

て、およそ7世紀中ごろに築造された神宮寺古墳は、その後11世紀末ごろの平安時代後期まで使用され、追葬が行なわれていたことになる。

また、東側壁の基礎部分で発見された彫刻による円文様は、極めて簡素なものである。変色した岩肌の中に、白い日輪を描いたように思われるが、手法的には極めて特異で、装飾としても単純である。変色している岩肌が、単に雨水などによるものか、人為的なものか、判然としない今日、その性格を断じ得ないが、日輪を呪術的な装飾として描いたことにはほぼ誤りあるまい。周辺地域の調査の進行によつて、比較研究が行なわれ、解明されることを期待したい。

註1 小林幹男 「上田市の原始・古代文化」上田市教育委員会 1974

註2 小林幹男 「他田塚古墳発掘調査報告書」上田市教育委員会 1973

註3 昭和49年4月から5月にわたつて、上田市教育委員会が調査を実施した。

註4 昭和49年3月に東部町教育委員会が調査を実施した。

註5 檜崎彰一 「埴器の道」(1)名古屋大学文学部二十周年記念論集 1968

あ と が き

川西地区には、半過古墳群。日向小泉古墳群など、終末期の群集墳をはじめとして、古代東山道に沿つて浦野塚古墳、室賀谷に神宮寺古墳。長谷塚古墳。上之平古墳などが点在している。現在確認されているものだけで、総計25基を数えるが、墳丘・石室ともにおよそ原形を保つのは、神宮寺古墳と浦野塚古墳など2～3基である。今回の調査は、古墳の学術的研究の上からは、その構造的解明がすすめられ、また、円文装飾の発見など、貴重な成果をあげた。また、文化財保護の見地からは、保存措置がとられる前提として、積極的に基礎的な資料の収集が行なわれ、文化財行政の指向すべき問題について、関係者に大きな示唆を与えるものであつた。

こうした企画を推進された上田市教育委員会、および文化財係の諸氏の努力に、心から敬意を表するとともに、今回の調査に献身された大学生。および高校生の諸君、そして地元有志の皆さんに、心から感謝申し上げたい。そして、この調査を契機に、学術的に残された問題、あるいは文化財保護のために講じなければならぬ方途について、研究・努力が払われることを期待して結びとしたい。

神宮寺古墳調査報告書

1974年8月 1日印刷

1974年8月15日発行

編著者 小林 幹 男

発行者 上田市教育委員会

上田市大手 1-11-16

印刷所 金井印刷所

長野県松本市旭3丁目1番1号(〒390)

信州大学人文学部

